

善と悪の選択

弘前大学教育学部附属中学校

齋藤 舞衣

『羅生門』は、天災が繰り返されすつかり荒廃してしまつた平安時代の京都を舞台に、職を失ひ行くあてが無く途方に暮れた一人の下人の話である。生きる為^{ため}に盗人になろうとするが、なかなか悪の道へ踏み切れず悶々^{もんもん}としている時に、楼

の内で死人から髪^{げんこ}の毛を抜く、奇怪な老婆に出会う。老婆の人として嫌悪をもよおす行いを目の当たりにし、一旦は正義を取り戻す下人だが、生きる為に仕方が無いことと自分の悪事を正当化し聞き直る老婆に後押しされたかのように、遂に道を踏み外す物語である。

正義や善の為に死を選ぶか、生きる為に悪に手を染めるか――下人は後者を選んだ。私が下人に対し、お前の正義感なんて所詮^{しょせん}その程度のものかと嘲笑^{あざわら}えるのも、この選択肢^{あざわら}が今自分の目の前に無いからである。万一この問題に直面したら、おそらく私は、「未練なく前者を選び、正しい事の為に命を捨てる」などということはできず、都合の良い言い訳を作るだろう。

幸せで不自由の無い生活を送っている時には、人は誰でも善人^{ぜんじん}でいられる。今の私もそうだ。「衣食足りて礼節を知る」という言葉があるが、物語の下人や老婆だつて、あのような状況にいなれば悪の道に走ることはなかつただろう。

人の本質は窮地^{きうち}にたつた時に表れるという。生か死かという究極の選択を迫られた時、一体どれだけの人が「人としての正しい道」を決断出来るのだろうか。はつきりと「命が危ういとしても人として正しい選択をします」と言いきれない今の自分を考える。すると、自分の中の善悪の基準や疑うこと無く当然だと思つていた正義感が危なかつかしく思えてくる。だからといって、いざそのような立場になつても悪いことを平然とやれる程の図々^{ずうずう}しさもまた今の私には無い。下人もそうだったように必ず心に葛藤^{こつとう}が生まれる。悪いとわかつていられるけれど背に腹は代えられない。だから自分を納得させる理由が欲しい。そういつて一生懸命頭を悩ませる。

考えてみると私の日常にも弱い自分を正当化しようとする

時はある。

例えば、いじめられているクラスメイトを見て見ぬふりした時。だつて止めたら自分もいじめられるかもしれないから等と言ひ訳をして自分の正当性を主張する時がある。心では正しくないことだと解^{わか}つていても認めたくないのだ。悪いことを迷いなく行うことは意外にも気持ちが悪く、やはり人としての良心との葛藤があるからかも知れない。最後は決まつて自分勝手な屁理屈を言つて自分を見捨てた人と思われ、その人を更に傷つけてしまうのだが、それでも謝罪を混ぜた言ひ訳をする。物語の下人も善と悪の境目を行き来していたが、自分が生きる為に悪事を行う。だから自分は悪くないと老婆の言葉を自分の悪の言ひ訳にし、正当化しているように見える。私の話と下人の話では事の重大さが全く違ふが、大なり小なり私たちの身近でも似たようなことは繰り返されている。しかしどんな言ひ訳をしても行つた悪事は消える訳では無く、どこまで行つても悪として残る。私がいじめを見て見ぬふりをした時のように言ひ訳は自分を守るための自分勝手な正義だ。老婆の衣をはいだ下人は生きる為にと称してその自

分勝手な正義を振りかざした。

羅生門という作品は人のエゴイズムを描いた作品だと書店の紹介文にあつた。エゴイズム——利己主義という意味らしいが、私たちの周りにはエゴが溢^{あふ}れている。自分のことしか考えない身勝手な人は多くいる。例を挙げると、被災して誰もいなくなつた家に下人と似たような理由で盗みに入る者も例に入るだろう。私自身の中にもそんな部分が無いとは言えない。普段はその部分を隠して穏やかに秩序ある生活を過^{すご}しているが、一皮むけばどうなるかわからない。私たちの将来に待ち受ける様々な選択に対し、どこまで自分の良心を保てるか葛藤する事が出て来ることは多いだろう。これは人に与えられた永遠の課題だ。私はまだ子供だが、生きるということとは自分が思うより大変なことも知れない。今の自分が出来るのは、少しでも自分の考える善や正義が揺るがないよう、自分の中に住む利己主義と闘ひ続けることだ。

下人は悪の道に走つたがその道だつて楽な道とは思えない。出来ることなら、同じ苦しさでも善の道での苦勞を選択できる人間でありたい。